



# 仲間集落散策

水・緑が感じられる史跡と拝所めぐり



## ・ 仲 間 の あ ら ま し

- ① 仲間は浦添市のほぼ中央に位置し、1,138 世帯、2,927 人（平成 24 年 2 月）の行政区です。
- ② 浦添小学校・幼稚園・浦添中学校、市民会館、市立工芸美術館、市保健相談センター、市社会福祉協議会、市運動公園、浦添郵便局、浦添警察署等市民生活に深く関わる公的な施設が立地する環境となっています。
- ③ 仲間はかつて、浦添（ウラシー）ともよばれていました。1721 年に出された「中山伝信録」によると浦添に所属するムラとして 11 記述されています。浦添（浦添山がある）、伊祖、牧港、安波茶、沢岬、屋富祖、城間、西原、内間、勢理客、前田です。仲間は浦添グスクを有し、番所など間切りの要所が置かれ古くから政治行政の中心であったことから「浦添の中の浦添」として胴村（ドゥムラ）「注 1」と尊称されていました。また、1713 年に琉球王府によって編集された「琉球国由来記」には、「中間掟」の記述もあり中間という呼称が古くからあったことがわかります。
- ④ 仲間は琉球王都の歴史的な中核を有する浦添グスクをクサティ（腰当）「注 2」として発展した古い歴史を持ち、沖縄の伝統的集落形態をなしています。現在も村拜みの重要な拜所が 12ヶ所あり、その内浦添グスク内に六ヶ所もあります。
- ⑤ 浦添グスクは標高 130～140m の琉球石灰岩の丘陵で、舜天王統、英祖王統、察度王統の三大王統の居城として栄え、首里に王府が移る以前の中山王城だったといわれています。また、歴史書などでは、琉球の王国は源為朝の子であるとされている舜天王から数え始めているので、今から約 600 年あまり前の 1187 年に舜天が王位についたときから琉球の王権が始まったと考えられます。
- ⑥ このように、仲間は歴史的に由緒ある立地のため、王府時代の番所（現役場・役所）や王都首里へつながる宿道（尚寧王の道）「注 3」も整備され、沖縄初の仏寺であるとされる龍福寺や英祖・尚寧王墓陵である浦添ようどれなどの史跡も数多くあります。

注 1) ドゥムラ・・・間切の名と同じ名の村（ムラ）。例えば具志頭間切の具志頭ムラのようにドゥムラがあり、仲間は（浦添）ウラシーとも呼ばれていた。

注 2) クサティ・・・背後の寄り添う聖なる杜。村の御嶽の神は村人をこよなく愛しながら見守り、村人は御嶽の神を心から信頼し、寄りかかり、後ろ盾にして護ってもらっている状態を村人から見て御嶽をクサティと表現。

注 3) 宿 道・・・近世において首里を中心に各間切・島をつないだ文書・伝達ルートのために整備された基幹道路。一般には各間切番所が中継点。

## ・ 仲間の拝所・史跡めぐり

### 趣旨

浦添市が急速に都市化するなかでも、仲間自治会が神聖な場所として拝み続けている12ヶ所の拝所や史跡を子ども達と一緒に散策しながら、仲間の歴史を感じ、魅力を見つけ、伝統を継承する機会にしたいと計画しました。

#### \* ムラウガミの拝所の順番（現在）

- ①仲間ンティラ ②根殿内（ニードウンチ） ③ヌンドンチ ④仲間火ヌ神  
⑤仲間樋川（ナカマヒージャー） ⑥世持井（ユムチガー） ⑦シーマヌ御嶽  
⑧カラウカー ⑨カガンウカー ⑩グスクヌトゥン ⑪ディーグガマ  
⑫クバサーヌ御嶽（⑥～⑪は浦添グスクにあります）

#### \* 史跡等

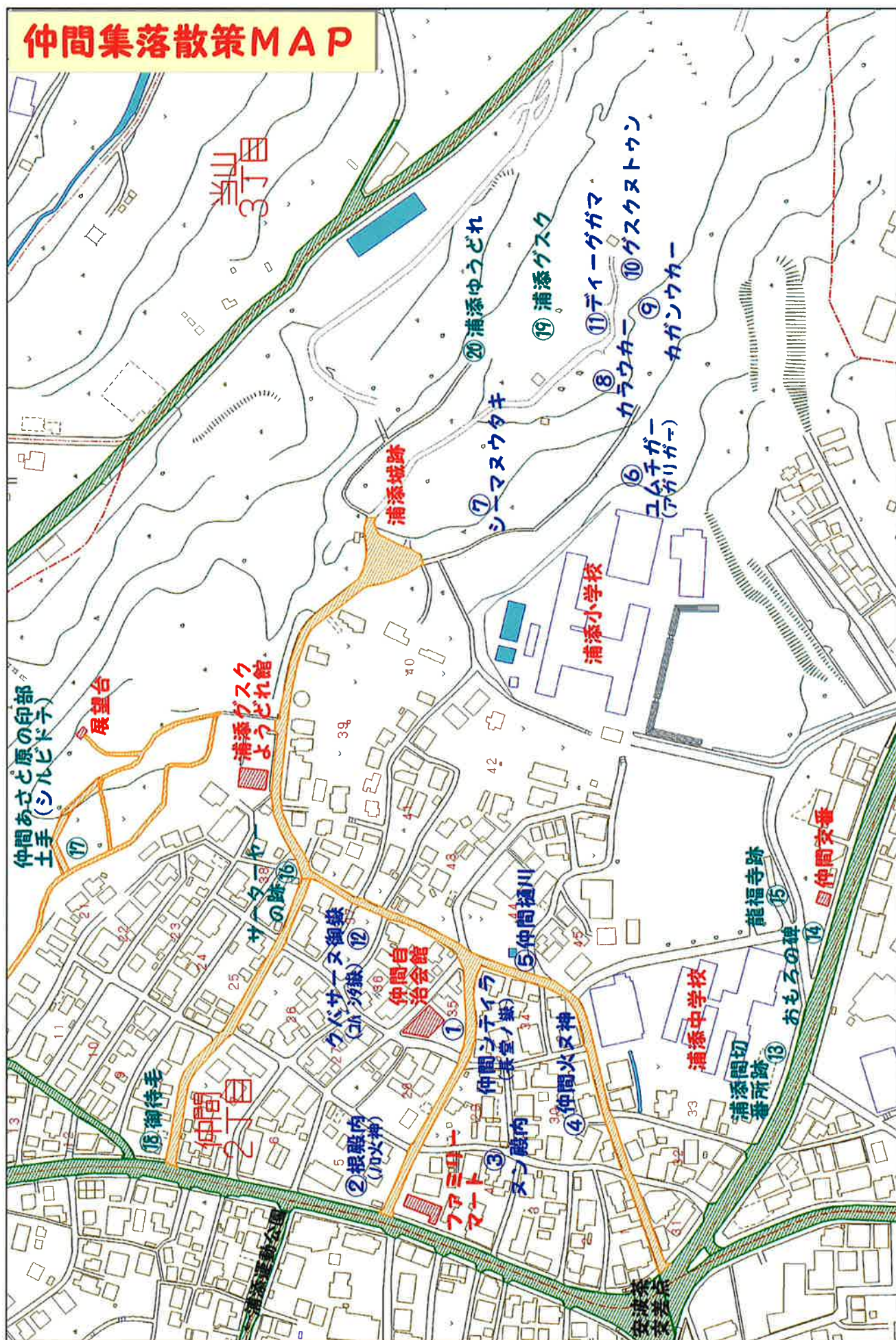
- ⑬浦添間切番所跡 ⑭おもろの碑 ⑮龍福寺跡・浦添原遺跡  
⑯サーターヤーの跡 ⑰仲間あさと原の印部土手（シルビドテ）  
⑱御待毛（ウマチモウ） ⑲浦添グスク ⑳浦添ゆうどれ

#### \* 参考文献

なかま字誌、浦添市史、浦添市勢要覧等



# 仲間集落散策MAP





## ① 仲間ンティラ



仲間にはムラ拝みに回る拝所が12ヶ所ありますが、現在はノロがないので、自治会長を中心に役員、楽生会、婦人部、会員で行っています。最初の拝みがこの仲間ンティラです。（浦添市史第4巻では最後に拝むと記述されています）

沖縄の古い村落（シマ）には必ず、そのムラ共同体の<sup>ほこ</sup>祠った神の居る聖地があって、こうした聖地を御嶽（ウタキ）または森（ムイ）と称するようになっています。（場所によっては、ウガン、ウガミ山、オン（八重山）、スク（宮古・奄美）と称するところもあります）

「琉球国由来記」に記されている長堂之嶽が仲間ンティラに当たると考えられています。

戦前は、赤瓦葺きで、壁は石積みだったようですが、去る沖縄戦で失われ現在の形になっています。

仲間の字誌には、仲間ンティラの神は、スク（地底）の神ともいわれ、仲間以外の人々の参拝者も多いと記されています。

平成14年3月1日に市の文化財に指定されています。

## ② 根殿内（ニードウンチ）



根屋（ニーヤー）は村落を創設したとされる草分けの家で、その当主が根人（ニーツチュ）に当たります。浦添の歴史の中心は仲間村であったと伝わっており、ニーヤーも仲間では、殿内と敬称され根殿内と呼ばれています。

ニーヤーは村落祭祀の中心となる家といわれており、この拝所は与那覇門中によって維持管理、継承されています。ムラ拝みも2番目にまわります。

（浦添市史第4巻では最初に拝むと記述されています）



### ③ ヌン殿内（浦添ノロ殿内）



ノロ（ヌルともいう）とは、そのほとんどが首里王府によって任命された地方在住の祭祀を司る神女のことです。「琉球国由来記」（1713年）には、浦添間切りに5人のノロ（浦添ノロ、澤岨ノロ、中西ノロ、饒平名ノロ、城間ノロ）がいて、それぞれの火の神が中間、澤岨、中西、宮城、城間にあること、「浦添ノロ」と呼ばれた仲間ムラのノロは、中間、前田、安波茶、伊祖、牧港、西原の祭祀を取り仕切っていたことが記されています。

ヌン殿内は浦添ノロが住んでいたところで、現在も見事な石垣がのこされ、ノロが祭祀に赴くときに出入りした門も見ることができます。また、拝所には「浦添王子」と彫られた香炉があり、敷地内には、ノロが馬に乗るときに踏み台にした「ウマヌイ石」が残されています。

ムラ拝みは3番目にまわります。

#### ④ 仲間火ヌ神



沖縄の火ヌ神には、各家庭で祀る火ヌ神のほかに、ムラの火ヌ神があります。この石の祠は、近世の仲間村の「地頭火ヌ神」といわれています。

地頭は琉球王国時代に間切や村（今の字）を領地にした士族で、その就任や退任のときに拝んだところでした。

また、王府の公的祭祀として、浦添ノロが執り行う稲二祭（ウマチー）「注1」などでも拝まれたようです。

以前より敷地はせばめられていますが、祠の石積みなどは戦前のまま破壊されずにその姿をとどめています。

平成14年3月1日に市の文化財に指定されています。

ムラ拝みは4番目にまわります。

注1）ウマチー（御祭）・・・稲作や麦作にかかわる村落レベルの年中祭祀であると同時に祖先祭祀の一環としてなされる門中レベルの年中祭祀でもある。



## ⑤ 仲間樋川（なかまヒージャー）



浦添市内でも最も大きな井泉のひとつで、仲間集落の村ガー（共同井戸）として大切にされてきました。

昼夜湧き出る仲間樋川は、飲用水、洗濯用水、雑用水、灌漑水の順序に利用する工夫がされています。例えば、平場の中ほどに十字のしるしがありますが、そこから前方では洗濯を禁止することを示したものです。

戦後は、仲間の収容所に集められた数千人の生活用水をまかっています。

各家庭に水道が普及する以前は、子供が生まれた時の産水（ウブミジ）、正月の若水（ワカミジ）を汲んで家の火ヌ神や仏壇に供えていました。

平成14年3月1日に市の文化財に指定されています。

ムラ拝みは5番目にまわります。



⑥ ユムチガー（アガリーガー）



浦添小学校の北側にあり、後方はうっそうとしたグスクの山となっています。学校の敷地はウィーグムイといわれる田で、まわりは松林であったといわれています。戦後はこの水を利用してマーミナ（モヤシ）を作っていた人もいたそうです。

⑦ シーマヌウタキ



グスクの西南にあり伊波霊園の南の方になっています。戦前は岩の突き出た下の方に香炉が置かれ、燈籠が二つあり、言い伝えでは、カンジャー（カジヤ）の跡だともいわれ、カニマンウタキともいわれています。



⑧ カラウカー



昔のグスクに通じる道沿いにおいて、城原、山川原、上原の接点になっているところです。四角に掘られ、石積みがなされています。近くにはウマヌイイシや碑文「浦添城正門の碑」があり、周辺は芋畑になっていたそうです。

⑨ カガンウカー



城内の南側に位置していて、昔城内の女達が水鏡で化粧をしたとつたえられていて、水質はとってもよかったそうです。



## ⑩ グスクヌトゥン（殿）



トゥンはウマチーなどの村落共同体が崇べる神を招請して祭りを行う場所のことで、沖縄本島南部及び周辺離島における名称です。国頭・奄美地域では、神アシャギといわれています。

このトゥンは戦前は

20坪くらいの敷地で石垣で囲われていたそうですが、今は何も残っておりません。（琉球国由来記には、浦添のトゥンとして15村落に22のトゥンが記されています）

## ⑪ ディーグガマ



グスク内にあるガマで、香炉の側に大デイゴ樹があったといわれています。香炉のあったといわれている場所には、浦添王子遺跡と記された碑が建てられており、その浦添王子の碑を拝んでいます。戦時中は、多くの人達が避難した壕です。



## ⑫ クバサーヌ御嶽



クバサーヌ御嶽は、仲間集落の発祥の地として伝えられています。

「琉球国由来記」（1713年）には、「コバシタ嶽」と記載されています。この一帯はウガングワーヤマとも呼ばれ、戦前は大木がうっそうと茂っていたようです。古老によると、石で積み封じた神墓があったとのこと、また裸世のころには、クバの木の下で子供を出産したという言い伝えもあります。

平成14年3月1日に市の文化財に指定されています。

ムラ拝みは最後の12番目にまわります。



### ⑬ 浦添間切番所跡



浦添中学校のテニスコートあたりが浦添間切番所があったところです。

間切は現在の市町村に相当する琉球王国時代の行政区画のことで、「番所」は今の役所にあたります。首里王府の命を受け間切内の行政を担っています。また、国王の普天満宮参拝の祭には休憩所としても利用されています。

番所は、1897年に間切役場、1908年には、村役場と改められ沖縄戦で損壊するまで浦添の行政の中心施設でありました。戦後は、昭和21年4月に浦添初等学校校舎一部を使って村役場が開庁し、昭和25年に仲間2番地（番所があったこのあたり）に移転し、昭和40年に今の市役所がある場所に移るまで村役場がありました。

現在の市庁舎は1997年（平成9年）7月に行政棟が完成しています。  
（浦添市勢要覧）



⑭ おもろの碑



うらおそいの ね國  
 もゝと つも こがね  
 うらおそいど ありよる  
 又とかしきの まくに (平成5年建立)

「浦添は、黄金が寄り集まり、永久に黄金が積もるほど繁栄が続いている。これほどの土地は浦添にしか見られない」という内容です。

「もゝと」は百年で永遠の意味

「ねくに」と「まくに」は国の中心を意味するほめ言葉

「とかしき」は浦添の古い地名で国の中心になってから浦々を治めるという意味の「うらおそい」に変わり、その後「浦添」に変化してきたと考えられています。

「おもろさうし」は、首里王府が沖縄・奄美諸島に伝わる古歌謡を記録したものです。その中から浦添に関係する歌を選び、ゆかりの地に石碑「おもろの碑」を建立してあります。昭和63年から平成7年にかけて建てられた9基の一つです。



## ⑮ 龍福寺跡・浦添原遺跡



龍福寺は首里王府の官寺で第一尚氏以前の歴代国王が祀られていました。「琉球国由来記」（1713年）などによると、その昔は極楽寺と呼ばれ英祖王の時に浦添グスクの西に建てられました。しかし、往来に不便で荒れすたれたため、「前谷」に移され、その後火災にあいこの場所に移され、龍福寺に改名されました。また、1609年の薩摩侵攻の祭焼き払われ、後に尚寧王によって再建されました。その後の龍福寺は、兼城村（現糸満市）、美里村（現沖縄市）泡瀬に移転しました。

### 浦添口説（うらしいくどうち）の3番の歌詞

ティラヌハジミヤリュウフクジ  
寺ぬ始みや龍福寺  
ヲウガディハンジョウ  
拝でい繁盛

ウラシメエーマトウムラヌカミ  
浦添真山戸村ぬ神  
ナカマムラ  
仲間村

浦添中学校一帯の地中には、浦添原遺跡が眠っています。

14世紀頃の畑の跡が見つかっています。ヘラを使って作物を育てていたと考えられています。



## ⑩ サーターヤーの跡



サーターヤーとは製糖所のことをいいます。製糖技術が17世紀の琉球王国に伝わって以降、各地に設置されるようになりました。薩摩侵攻による敗戦後、尚寧王から沖縄産業の復興を考えて農務大臣に任命された儀間真常が、初めてキビを搾りそれ

を結晶させて、きわめて商品価値の高い黒糖を作ることに成功したことで、各地にその技術と仕組みを広めることができたといわれています。サーターヤーには、キビの汁を搾るサターグルマ、汁を煮詰める釜小屋、薪小屋などがあり、運営は数件の家で構成する「砂糖与」（サトウグミ）が担う仕組みです。仲間集落には、8ヶ所（7つの与と個人）のサーターヤーがあったそうです。

## ⑪ 仲間あさと原の印部土手（シルビドテ）



印部土手は、検地（徴税のための土地測量）で使われた基準点で、中央のハル石とよばれる碑からの方角と距離で田や畑の位置を記録しました。ハル石には、地名（小字名）と平仮名あるいはカタカナが一文字彫られています。このハル石には「あさと原」と「ス」が記さ

れています。琉球では、1737年から14年かけて行われた元文検地のときに数千もの印部土手がつくられましたが、明治時代以降は使われずほとんどが失われています。



## ⑱ 御待毛（ウマチモウ）



琉球王国時代には、仲間村を通る二つの大きな公道がありました。一つは首里から牧港・読谷へと続く「中頭方西海道」（ナカガミホウセイカイドウ）、もう一つはこの道から枝分かれして当山を通り宜野湾の普天満宮へと至る道です。このあたりは、ちょうど二つの道の分岐点にあたり、首里と地方を往来する国王や役人を仲間村の人々が出迎える場所であったことから、御待毛と呼ばれていたところです。「毛」とはおきなわの方言で「広場」や「原っぱ」という意味です。

## ⑲ 浦添グスク（写真は、背表紙を参照）

浦添グスクは首里城以前の中山王城だったといわれています。市の発掘調査によって、14世紀当時最大級のグスクであったことがわかっています。また、グスクの西にはウィーグムイと呼ばれる大きな池が造られ、周辺には寺（極楽寺）や王陵（浦添ゆうどれ）、有力者の屋敷や集落などがあり後の王都・首里の原型ができあがっていたと考えられています。察度王統の時代に全盛期を迎え、尚巴志に滅ばされ廃墟となりますが、1524年に尚真王の長男・尚維衡の居館となり、尚維衡の曾孫・尚寧が第二尚氏7代琉球国王時代の1609年薩摩藩の侵攻により焼き討ちされるまで浦添家の居館でありました。

## ② 浦添ようどれ



浦添ようどれは、浦添グスクの北側崖下にある琉球王国初期の王陵で、岩を掘り広げて二つの墓室を造っています。向かって右側（西室）が英祖王、左側（東室）が尚寧王の墓といわれています。内部に安置されている石厨子は県の文化財に指定されています。「ようどれ」とは、「夕風」や「夕方の静かな状態」のことを指し、転じて墓を意味するようになったと考えられています。沖縄戦や碎石工事で破壊されましたが、平成 17 年に復元が完了し往時の姿を取り戻しています。



### \* 西室（英祖王陵）

- ①主室面積 約 49.0 m<sup>2</sup>
- ②奥室面積 約 9.0 m<sup>2</sup>
- ③高さ 約 3.6 m

### \* 東室（尚寧王陵）

- ①主室面積 約 37.0 m<sup>2</sup>
- ②脇室A面積 約 2.2 m<sup>2</sup>
- ③脇室B面積 約 2.7 m<sup>2</sup>
- ④高さ 約 3.0 m

### \* 一番庭

- ①面積 約 370.0 m<sup>2</sup>
- ②北石積高（内高） 約 2.5 m
- ③西石積最高部高 約 8.2 m
- ④ナーカ御門高 約 2.5 m
- ⑤ナーカ御門幅 約 1.7 m

### \* 二番庭

- ①面積 約 60.0 m<sup>2</sup>
- ②北～西石積高（内高） 約 2.0 m

- \* 前庭 面積 約 30.0 m<sup>2</sup>





国指定の史跡として注目される城跡全景（昭和58年）



国指定の史跡として注目される城跡全景（平成 24 年）



仲 間 自 治 会

浦添市仲間 2 丁目 3 5 番 2 号

電話番号 8 7 6 - 1 6 4 9

発 行 平成 24 年 3 月